

1.はじめに

佐藤(1987a[1982], 1987b[1983])では、集合同士は加盟成員を共有しているにもかかわらず、外延については重なっているのに、内包については無関係であり、媒体(Vehicle=言表されている意味)と趣意(Tenor=言表されずに理解される意味)の関係が内包・外延において隠喩と逆になっている「逆隠喩」が提唱されている。

だが、どのような場合に「逆隠喩」が成立するのかという問題はこれまでに森(2007)、靱山(2016)、山泉(2018)で議論されているものの、未解決の部分が残る。まず、先行研究で主に議論されている媒体は「政治家」「スポーツマン」「江戸っ子」「従兄」に過ぎない。次に、森(2007)、靱山(2016)では、「逆隠喩」の成立には、カテゴリー内のステレオタイプが関わるのが中心的に主張されている。それに対して、山泉(2018)が言及するように「従兄」という媒体で「性的対象でない」という趣意が伝達される場合はステレオタイプが関わるとは言い難い。本発表では、実際の用例に基づき考察を行い、媒体に対する話者の評価によってステレオタイプの知識とフレームの知識を基盤に「逆隠喩」が成立することを主張する。

2.「逆隠喩」の概要

・佐藤(1987a[1982], 1987b[1983])

たとえば、村会か国会かは問わず現に政治にかかわっている人物について、いつも策略をもちいたがる油断のならぬ存在という趣意を込めて「なにしろあいつは<<政治家>>だから」と言うようなばあいがある。おなじように、まったく逆の趣意をふくめて、「あの人は<<スポーツマン>>だから、まさか」と言ってその人の卑劣さについての悪い噂を打ち消すのもおおいにありうることばづかいであろう。

佐藤(1987b[1983]: 125)

⇒媒体(V)と趣意(T)の関係において、「なにしろあいつは政治家だから」という場合、「政治家」という媒体で、「いつも策略を用いたがる油断のならぬ存在」という趣意が伝わる。また、「あの人はスポーツマンだから」といったとき、「スポーツマン」という媒体で、「そっちょくな男」という趣意が伝わることになる³。

(1) [.....]是は僕の方ばかりではあるまい、千代子もおそらく同感だらうと思ふ。其証拠には長い交際の前後を通じて、僕は未だ嘗て男として彼女から取り扱はれた経験を記憶する事が出来ない。彼女から見た僕は、怒らうが泣かうが、科をしやうが色眼を使はうが、常に変わらない従兄に過ぎないのである。

佐藤(1987b[1983]: 138,夏目漱石『彼岸過迄』から)

⇒「男」と「従兄」が「逆隠喩」の例とされる。山泉(2018)も言及するように「従兄」という媒体で「性的対象でない」という趣意が伝達される場合はステレオタイプが関わるとは考えにくい。また、直接的に類種の関係や類似性を見出すのも難しい。

1 本発表におけるステレオタイプは、「(ある言語共同体において)あるカテゴリーの成員全般に関して、十分な根拠なしにある特徴を有すると広く信じられてはいるが、実際にそのような特徴を有するのは、カテゴリーの成員の一部であるという場合に、そのような一群の成員(下位カテゴリー)のこと。」(靱山 2010: 9)という定義に従う。

2 用例中の傍線は断りのないものは全て発表者に拠る。実線は分析対象表現、点線は分析対象表現以外の注目すべき箇所を示す。また、用例に出典が示されていないものは全て発表者の作例である。

3 これらのタイプは潜在的逆隠喩とも呼ばれる。他にも、佐藤はラ・ロシュフコーの「節制は恐れである」という例を挙げ、顕在的逆隠喩と呼んでいる。本発表ではこのような例は周辺の事例であると考え、顕在的逆隠喩を考察の対象としない。

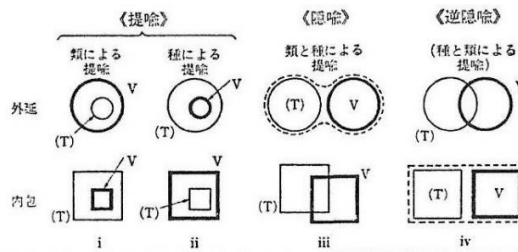


図1 佐藤(1987a[1982]: 112)「言語<<内>>の意味の関係にもとづく<<転義>>」より

⇒「逆隠喩」において、媒体と趣意の関係は、「集合と集合はかなりの加盟成員を共有しているにもかかわらずそれぞれの内包的定義は無関係」である。その点では、媒体と趣意が外延上無関係であり、内包的にのみ意味が交差し合う「隠喩」とは異なった解釈プロセスが想定されている。

3. 「逆隠喩」とステレオタイプ

・森(2007)

逆隠喩について提喻⁴とステレオタイプ概念を用いて、考察した。森は、逆隠喩を種によって「代表させる提喻」の逆といえるような、種による類への拡大に通じる現象であるとし、提喻の一環として捉え直した。本来、種にすぎないものがステレオタイプとなって類へと拡大したプロセスが「逆隠喩」の正体であると主張している。

・楠見(1990)

提喻に依拠する推論のパターンには、カテゴリーから成員（メンバー）への推論と、成員からカテゴリーへの推論の二方向が存在するとしている。そして、この推論のパターンについて、次のように述べている。

カテゴリーから成員への推論の代表例には、ステレオタイプに基づく直観的推論がある。ステレオタイプは、社会的知識の一部である（その中には、性や職業などの役割スキーマがある）。たとえば、私たちが、初対面の人の職業や出身校といった所属集団に関する情報を求めようとするのは、ステレオタイプに基づいて推論を行うためである（例：教師は真面目だ。A大学出身者は秀才だ）。逆に、成員からカテゴリーへの推論は、ステレオタイプの形成過程にあたる（例：B大学のある学生に関する情報に基づいてB大学全体の評価をする）。

楠見(1990: 202)

⇒森は、楠見(1990)の推論のパターンを参考に、「逆隠喩」とはステレオタイプを形成する推論と同一の現象であり、「ステレオタイプの思考＝「逆隠喩」的思考」（森 2017: 170）であると述べている。

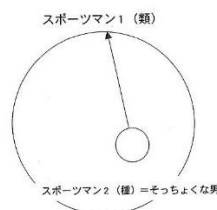


図2 森(2007: 171)「逆隠喩」のメカニズム

・山泉(2018)

ステレオタイプ説に対し、関連性理論における語彙語用論の観点からの説明が試みられている。山泉は逆隠喩を語彙的縮小と位置付けて、①発話の明示的内容、②コンテクスト的、③認知効果、の3つの聞き手による相互調整から考察を行った。この研究では、逆隠喩はアドホック概念構築を含む一般的な発話解釈の方法に沿って解釈されているだけであり、ステレオタイプが参照される必要が常にあるわけではないことが結論付けられている。

⁴ 森(2007: 173)では、提喻を「類と種（上位カテゴリーと下位カテゴリー）の関係を基盤とした比喩」と捉えている。本発表においても、この考えに従う。

(2) A: 「あいつ、なんで最近昼メシにカップ麺ばかり食ってんの？」

B: 「家買ったらしいよ」

(山泉 2018: 17, 下線はママ)

⇒名詞以外の逆隠喩が存在し、その解釈にはフレームが関与する換喩が働くことも提案されている。ここでは、家を買うという行為に付随する多額の出費をする行為を伝達するため「逆隠喩」とみなせるとしている。この解釈に関与するのは家を買うことのフレームであり、単一の行為のフレームが関与するとされる。

4. 「逆隠喩」成立の考察

4.1 媒体のステレオタイプを基盤に「逆隠喩」を成立させるパターン

(3) あるおばさんが身を乗り出してバスを待っていた。ああなるともう「ザ・おばさん」だ。(梶原 2017: 87, 下線はママ)

⇒梶原(2017)は「カテゴリーの中心部を際立たせるヘッジ表現」としての「ザ+名詞」がとれるものに「おばさん」をはじめとしたヒトカテゴリーがあることが提案されている。これらは「カテゴリーらしさ」が焦点化され、その特徴はステレオタイプ的であるとされている。また、齋藤(2011)において、「おばさん」が<皮肉>の意味を持ち、これはステレオタイプに基づく提喩により動機づけられていることが指摘されている。

(4) (身を乗り出してバスを待っている中年女性に対する発話)

ああなるともう「おばさん」だ。

(5) (中年女性 A さんが知らない人にバスの行き先を教えている場面に対する B さんの発話)

A さん: そこに行くバスはこっちだよ。

B さん: ああなるともう「おばさん」だ。

(6) 「お客様を見ているとつい何かしてあげたくなっちゃうんですよ」。モスバーガー関内店(横浜市)のパート店員、童崎はなさん(6.6)はオープンまもなくから働く最古参だ。自らを「お節介おばさん」と話す彼女は積極的にお客とコミュニケーションをとることで多くの固定客を作ってきた。(日経MJ(流通新聞) 2015/12/25)

⇒媒体: 「おばさん」 / 趣意: (4) 「図々しい」、(5) 「世話好き」、(6) 「お節介」(自称)

(7) (アニマル柄の服を着た関西出身の友人 A さんに対する発話)

A さんは関西人だね。

(8) 走者を置いた実戦形式のノックでは「そんな走塁、試合ですか? クビだクビ」。おのずと緊張感が高まるが、不思議と明るさが絶えない。捕手とヤジがかぶると「同じこと言わんといて」とすかさず突っ込み、周囲にどっと笑みが広がる。

「関西人ですから」と橘田は頭をかくが「楽しんでやってほしい。そのほうが絶対にうまくなる」というのが本心だ。(日本経済新聞 2017/08/09)

⇒媒体: 「関西人」 / 趣意: (7) 「派手好き」、(8) 「笑わせ好き」(自称)

⇒金水(2003: 82-83)は、「大阪人・関西人のステレオタイプ」として以下の複数の特徴を挙げている。

①冗談好き、笑わせ好き、おしゃべり好き②けち、守銭奴、拝金主義者③食通、食いしん坊④派手好き⑤好色、下品⑥ど根性(逆境に強く、エネルギーにそれを乗り越えていく)⑦やくざ、暴力団、怖い

(9) (気前よくお金を払った東京出身者の太郎に) 太郎はさすが江戸っ子だ。

(10) (気前よくお金を払わなかった太郎に) 太郎は江戸っ子らしくないねえ。

(山泉 2018: 17, 下線はママ)

⇒媒体: 「江戸っ子」 / 趣意: (9)・(10) 「気前が良い(竹を割ったような気性)」

⁵ 本発表における換喩は、西村(2004: 102)の「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」という定義に従う。

→「竹を割ったような気性」自体が直喩的では？「さすが」「らしい」は逆直喩の標識？

(11) (気前よくお金を払わなかった関西出身の太郎に) 太郎はザ・関西人だね。

⇒媒体：「関西人」／趣意：「けち」

→「ザ+名詞」で置き換えられる。→媒体におけるカテゴリーの帰属性が関与すると考えられる。

⇒文脈を参照し、話者の評価によって種から類へ提喩を介して指示対象が移ることが指摘できる。こういった「逆隠喩」の場合、特定の社会で共有されているいくつかのステレオタイプのなカテゴリーの種の成員から話者が評価し、類の成員へと拡大させているためわずかな文脈でも趣意が伝達可能である。

4.2 媒体のフレーム内の知識を基盤に「逆隠喩」を成立させるパターン

(12) (男友達のCさんについて、女性のAさんとBさんの会話場面)

Aさん：最近、Cさんと仲いいよね。

Bさん：でも、Cさんは友達だから。

(13) (Aさんが友達のBさんに講義のノートを見せてもらおうと頼む場面)

Aさん：講義のノートをちょっと見せてよ。僕たちは友達だろ。

Bさん：仕方がないな。

⇒媒体：「友達」／趣意：(12)「恋愛対象ではない」、(13)「助けてくれる」

(14) (ノートを貸した太郎へ後輩からのお礼の発話)

後輩：貸してくれたノート役に立ちました。ありがとうございます。やっぱり、太郎さんは先輩ですね。

(15) (気前よく後輩の分のお金を払った太郎に対する同級生の発話)

同級生：太郎も先輩だねえ。

⇒媒体：「先輩」／趣意：(14)「頼りになる」、(15)「気前が良い」

⇒(1)と同様にステレオタイプの関係、類種の関係、類似性関係を直接的に想定することが難しい。個人間で共有されているフレーム的知識から指示対象が移る換喩が関与する。臨時的文脈に限り、話者と媒体の関係性に基づく換喩とも考えられる。従って、話者と聞き手との知識の共有が前提となり、より具体的な文脈が必要となる。

5.まとめ

「逆隠喩」は隠喩の逆ではない。「逆隠喩」の成立には、典型的にはステレオタイプに基づき媒体のカテゴリー内で種から類へ指示対象が移る提喩が関わる。また、媒体自体のフレーム内の指示対象が移る換喩が関与することがある。この違いのプロセスは連続的であり、文脈に応じた話者の媒体への評価によって媒体の成員のカテゴリー間関係を想起するか、媒体自体が持つフレーム内の知識を想起するかに過ぎない。どちらも、話者が媒体を評価し、意図的に成員の特徴を想起し、伝達する点ではステレオタイプの思考が働いていると考えられる。

<主要参考文献>

梶原彩子(2017)「ザ」の働きについて—百科事典的意味観からの考察—『日本語用論学会第19回大会発表論文集』12、81-88/金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京：岩波書店/楠見孝(1990)「直観的推論のヒューリスティクスとしての比喩の機能—提喩 換喩に基づく社会的推論の分析—」、日本記号学会(編)『トランスフォーメーションの記号論』、197-208、東京：東海大学出版会/梶山洋介(2010)「百科事典的意味観」、山梨正明他(編)『認知言語学論考』9、1-37、東京：ひつじ書房/梶山洋介(2016)「ステレオタイプの認知意味論」、山梨正明他(編)『認知言語学論考』13、71-105、東京：ひつじ書房/森雄一(2007)「隠喩・提喩・逆隠喩」、楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』、159-175、東京：ひつじ書房/西村義樹(2004)「換喩の言語学」、成蹊大学文学部会(編)『レトリック連環』、85-108、東京：風間書房/佐藤信夫(1987a[1982])「転義あるいは比喩のかたち—または逆隠喩について—」『レトリックの消息』、102-121、東京：白水社(初出：(1982)『理想』595,18-31。)/佐藤信夫(1987b[1983])「逆隠喩」『レトリックの消息』、122-139、東京：白水社(初出：(1983)『記号学研究』3、39-51。)/齋藤佳子(2011)「(敬意)と(皮肉)を表す(おばさん)の背景について—(自嘲)表現を中心にして—」『日本認知言語学会論文集』11、484-490/山泉実(2018)「佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：関連性理論の語彙語用論の観点から」『語用論研究』19、1-21。